

遺跡出土の鉛製玩具について —久喜市栗橋宿跡関連遺跡出土資料を中心に—

瀧瀬 芳之

要旨 明治時代に流行した鉛面子を、栗橋宿跡関連遺跡や都内の遺跡出土資料を中心に、考古学的分析を行った。その結果、鉛面子の初現は幕末に遡る可能性のあることが明らかとなった。栗橋宿跡関連遺跡における鉛面子の出土状況は、東京在地産が多くを占める都内の遺跡の傾向とは様相を異にしており、大阪産の鉛面子が集中して出土している。そこには、複数の流通ルートが存在したことが想定される。文献から、鉛製玩具に食玩の種玩具が存在することを指摘し、該当する可能性がある出土資料を抽出した。

はじめに

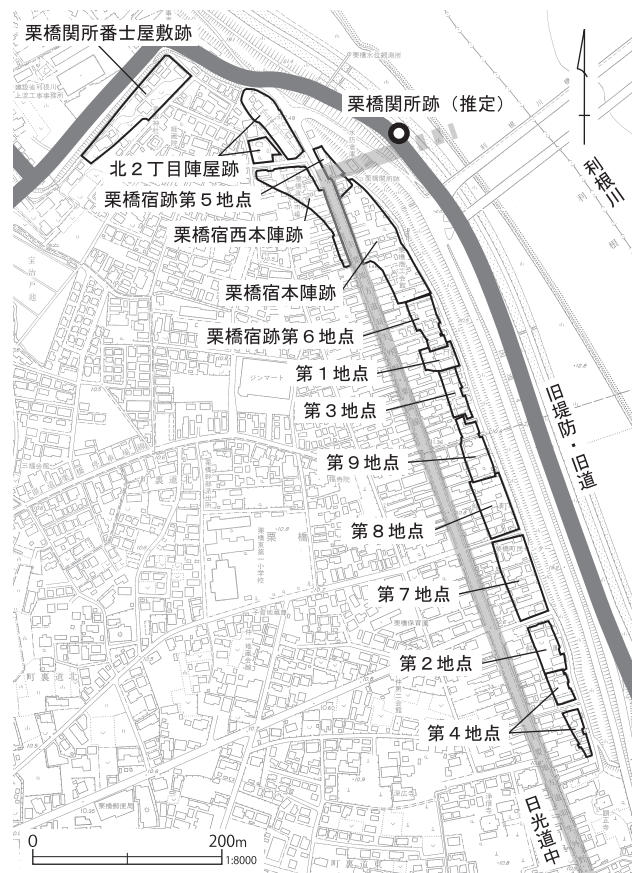
日光道中7番目の宿場町である埼玉県久喜市栗橋所在の栗橋宿跡関連遺跡—栗橋宿跡（第1～9地点）、栗橋宿本陣跡、栗橋宿西本陣跡、北2丁目陣屋跡、栗橋関所番士屋敷跡—（第1図）の発掘調査は、近世の宿場・町屋の実態を明らかにする貴重な成果をもたらした。遺跡からは、近代に属する遺構も検出され、当時の風俗を知ることができる、さまざまな遺物が出土している。今回は、鉛製の玩具を対象にして、各地の遺跡出土例も含めて考古学的手法を用いて検討していきたい。

1 研究略史

子どもの玩具や遊戯に対する関心は江戸時代にはじまり、文政13年（1830）刊の喜多村信節『嬉遊笑覧』には巻之六下に「児戯」の章がたてられ、天保8年（1837）に起稿した喜多川守貞『守貞謾稿』には第二十五編に「遊戯」として、当時の玩具や児童遊戯が記録されている。

明治時代に入ると、諸外国の文化が家庭や教育に取り込まれ、西洋の玩具や遊戯が流行する。こうした背景の中、日本古来の遊戯を見直し、後世に残すことを目的として、明治34年（1901）

に太田才次郎の編集による『日本全国児童遊戯法』が刊行された。この書は明治後期に他に先駆けて日本全国の伝統的な子供の遊戯を採録したもので、東京、京都、静岡（駿河）の報告で鉛面子



第1図 栗橋宿跡関連遺跡位置図

の記載がある。

西洋化が進む中で失われていく江戸文化を再評価しようとする動きは、玩具の世界においても旧来からの玩具を「郷土玩具」と名付けて盛んとなり、その研究や蒐集が各地で活発に行われていく。しかし、鉛面子など、明治期以降に流行した小物玩具は、その対象の主流とはならなかった。わずかに、山梨県出身の実業家である若尾謹之助が、鉛面子の形状や遊戯方法について記録し（若尾 1919）、玩具蒐集家の鈴木常雄が、私家本で鉛面子や種玩具を紹介している（鈴木常雄 1937・1940・1941）。鈴木は、鉛面子の主な製造元は東京と大阪にあるとしてそれぞれの特徴を記し、京都産の鉛面子も図示している（鈴木常雄 1941）。

玩具史においては、昭和 35 年（1960）に刊行された『日本金属玩具史』（深谷庄一編 1960）が唯一の文献といえよう。同書によると、明治時代の金属玩具の製作者は、明治維新によって失業した下級武士や、鋳掛屋や鋳師などの板金加工業者たちであり、「ガラガラ煎餅」と呼ばれる食玩の鉛製種玩具を、彼らによって初めて量産化された金属製玩具と位置づけている。また、鉛面子の流行を明治 12・3 年（1879・80）頃から日露戦争（明治 37～38 年（1904～05））後までとした同書の年代観は、それ以降の研究の指針となった。

一方、玩具は趣味の対象だけではなく、児童文化研究の研究対象として重要な位置を占めるようになった。鉛面子も「めんこ遊び」の系譜や、遊戯方法の歴史をたどる中で取り上げられている。代表的な著作に、中田幸平の『日本の児童遊戯』（中田 1970）や、半澤敏郎の『童遊文化史—考現に基づく考証的研究—』（半澤 1980）がある。

中田の著作は男子の遊戯を中心とし、半澤の著作は遊戯全般を網羅したものであったが、加藤理は、その著書『〈めんこ〉の文化史』（加藤 1996）で、「めんこ」を対象とした論考を展開している。加

藤は、「めんこ」の遊戯方法や変遷などを考察するだけではなく、その担い手である子どもとの関係性を重視している。

また、「めんこ」蒐集・研究家の鷹谷春文は、自らの所蔵品をまとめた『めんこグラフィティ～甦る時代のヒーローたち～』（鷹家 1991）を刊行した。その中で鷹家は、東京産、大阪産、京都産の鉛面子を紹介し、それぞれの特徴について述べている。

以上、研究史を概観したが、考古学において、鉛面子を含む金属製玩具は、ほとんど研究の対象として取り上げられてこなかった。これは近現代考古学の歴史が浅いことに起因するのは明白であるが、当該期の多種多様な出土遺物のなかで、質量ともに些少な存在であった金属製玩具は研究対象となりにくいことが大きな要因であろう。現状では、都市部の近世町屋等、いわゆる江戸遺跡の発掘調査において、鉛面子を近代に廃絶した遺構を示すメルクマールとして、取り扱っている感が強い。

こうしたなかで、唯一、仲光克顕は中央区日本橋二丁目遺跡の発掘調査報告書で、鉛面子が出土した遺構の廃絶年代を、共伴する陶磁器の年代観から 1860 年代から 1877 年（明治 10）ころとし、「今回の事例は鉛面子の出現について重要な事例となろう。」と指摘している（仲光 2001）。従来の玩具研究で示されてきた流行年代ではなく、鉛面子の出現年代を明らかにすることができる考古学の可能性を示唆したものとして重要である。

2 鉛面子

（1）名称

鉛製玩具の中でも、鉛面子は、玩具・遊戯研究、児童文化史、民俗記録、著名人等の回顧録など、幅広い分野の文献にその名をみることができる。その呼称は、地域によってさまざまで、表記方法も研究者によって異なっている。以下、論を進め

るにあたって、その名称について整理をしておきたい。

文献にみられる呼称を、地域別に分けて列記すると以下ようになる（すべてひらがなで表記）。

東京 なまりめんこ（川上 1944・渋沢 1980）

なまりめんち（太田編 1901）

なまりめん（大岡 1975）

群馬 なまり

（田中 1958・群馬県教育委員会 1968b）

なまりぶっつけ

（群馬県教育委員会 1968a・桑原編 1975）

埼玉 なまり（小川町 2001）

茨城 なまり（茨城民俗学会 1970）

神奈川 なまりめんこ（吉川 1961）

なまりぶっつけ（田代 1943）

山梨 なまり（若尾 1919）

静岡（駿河） へたんこ（太田編 1901）

愛知 ばんき（田原町教育委員会 1971）

兵庫 めんこ（和辻 1961）

富山 めんち（塚本 1967）

京都 かねめん（松田 1975・藤本 1986）

かなめん（湯川 1960・藤本 1986）

「めん」のつく呼び名は、江戸時代に初現をみる泥面子の呼称「めんがた」「めんうち」に由来するという（半澤 1980）。泥面子は明治維新後にも流通していたため、以上に紹介した名称の多くは「鉛でできためんうち」という、泥面子と区別するように材質を強調したものといえる。そこで、本稿では、泥面子の系譜につながる鉛製玩具を「なまりめんこ」と呼称し「鉛面子」と漢字で表記する。

（2）分類

鉛面子の分類は、基本的には栗橋宿跡関連遺跡をはじめ、各遺跡から出土した資料を対象とするが、現在まで残っている民俗資料やコレクション、さらに文献記録も考慮に入れる。本論では鉛面子の概念を「片面もしくは両面が無文で、厚さ1～

3mm程度の薄く平らな鉛製の玩具」と規定し、形状や絵柄の特徴から下記の4つに分類した。

A類 一定の形のなかに文様や絵柄を施したもの
円形をA1類、その他の形をA2類とする

B類 不定形で、仕草や場面を表した絵柄をそのまま外形とするもの

C類 器材や人物、面などを模ったもの

D類 円形で、表裏ともに文様や絵柄のない無地のもの

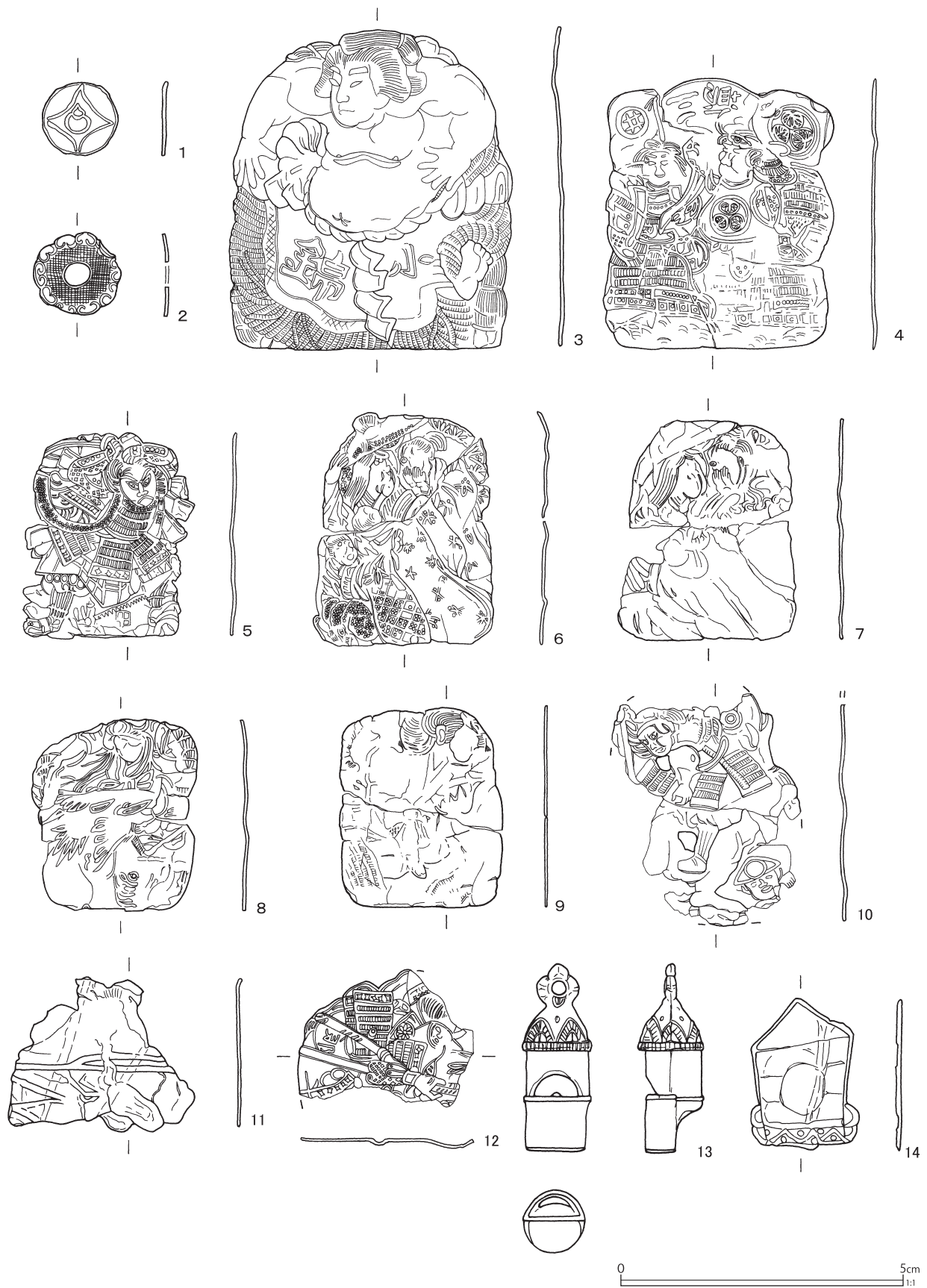
以下、各分類について、諸例を示しながら詳述する。

A類

A類は北2丁目陣屋跡から2点（第2図1・2）、栗橋宿跡第9地点から2点（第3図22・23）出土している。都内の江戸遺跡で最も多くみられるのがこのA類で、特に千代田区外神田四丁目遺跡から出土した鉛面子44点のうち、1点を除く43点がA類である（第4図2・3・5～13）。そのほかにも中央区日本橋一丁目遺跡（第4図21・24）や新宿区内藤町遺跡、渋谷区千駄ヶ谷五丁目遺跡（第4図52・54～56・58）などから複数のA類鉛面子の出土がみられる。

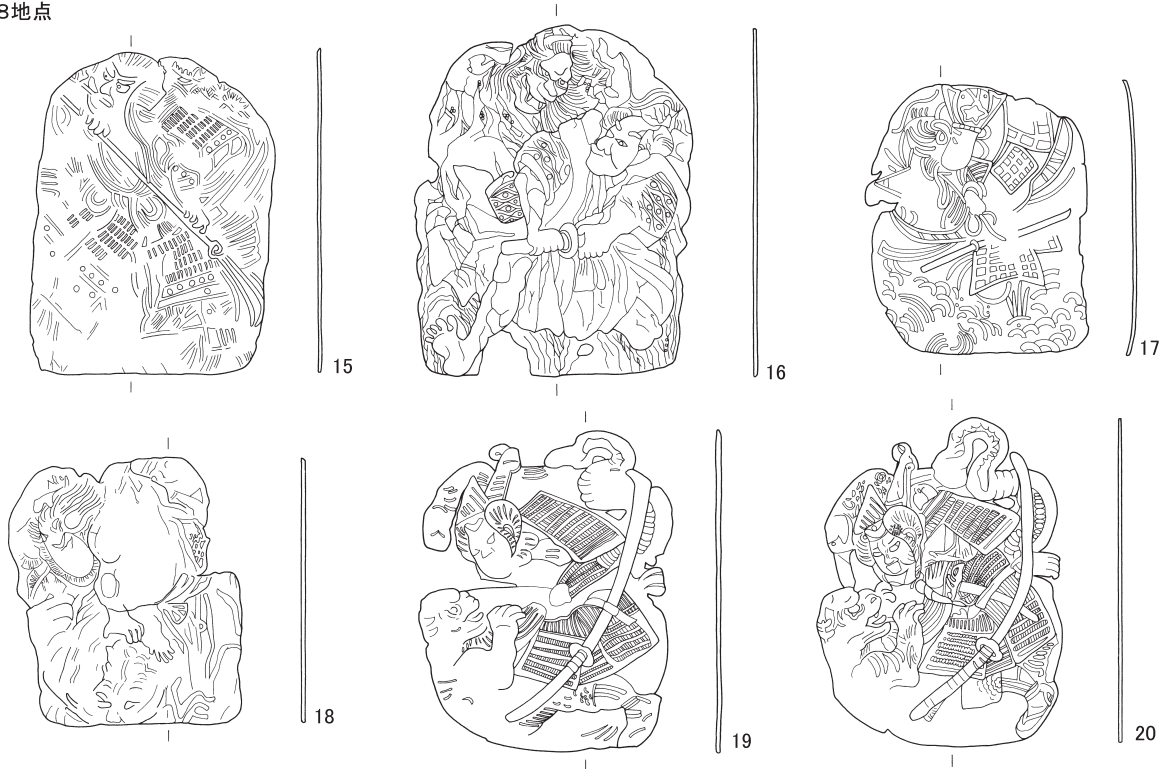
A類の鉛面子は、管見の限りでは119点の出土例があるが、そのうちの大半（約92%）を占める110点が円形のA1類である。A2類には、花形、菱形、六角形、八角形、小判形などがある（第4図35・37・38・52・62）。数は合わせても8点と稀少である。なお、第2図2は花形としてA2類に分類したが、中心に孔が開いており、他の例とやや様相を異にする。

A1類の直径を1mm単位（1mm未満は四捨五入）で分けてグラフ化したものが第5図である。このグラフを見ると、径22mmをピークとした大きな一群と、径42mmをピークとした一群に分けることができる。現段階では、前者（径19～34mm）を中型、後者（径37mm以上）を大型とし、径18mm以下のものを小型と分類しておく。



第2図 北2丁目陣屋跡出土鉛面子・鉛製種玩具

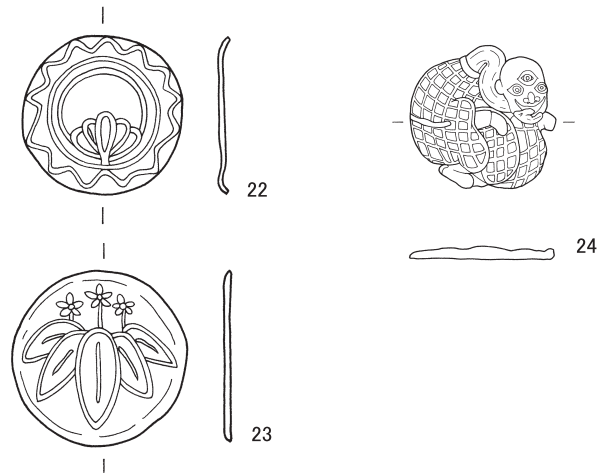
第8地点



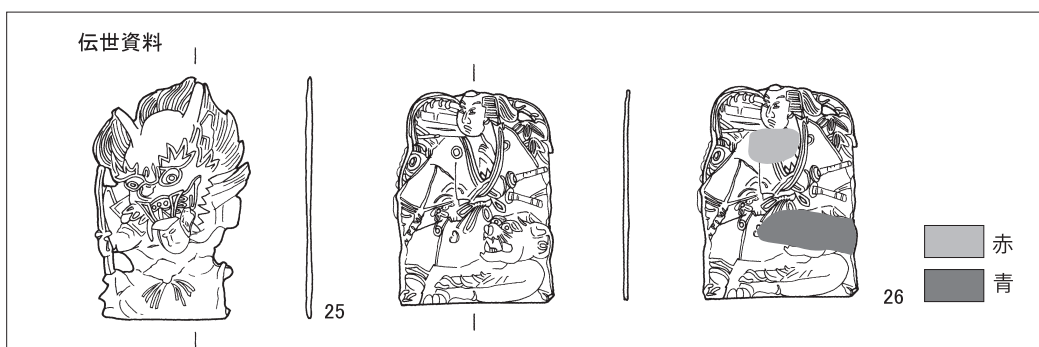
第9地点



第6地点



伝世資料



赤
青

0 5cm
1:1

第3図 栗橋宿跡出土鉛面子・鉛面子伝世資料

第1表 栗橋宿跡関連遺跡出土鉛製玩具一覧表（付 伝世資料）

遺跡名	遺構名	時期	挿図No.	類	縦 (mm)	横 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	絵柄・文様	文献 No.
北2丁目陣屋跡	第2号井戸跡	9期	2-1	A 1	13	13	0.6	0.8	七宝内に宝珠	1
			2-2	A 2	14	15	0.5	0.7	10 弁花文 花卉唐草 地紋格子 中心に孔	
			2-3	B	56	50	0.6	12.1	相撲力士 小錦八十吉（第17代横綱）	
			2-4	B	47	40	0.5	7.2	徳川家康と井伊直政「徳川」（鏡文字）	
			2-5	B	37	30	0.5	4.3	武者（旗印は「四つ目結」で佐々木高綱か）	
			2-6	B	41	32	0.7	5.2	傘をかぶる婦人（赤子を抱き男児連れ）と男	
			2-7	B	39	32	0.5	4.3	同上	
			2-8	B	34	30	0.8	3.2	源（六孫王）経基か	
			2-9	B	35	29	0.4	3.9	武者か	
			2-10	B	41	33	0.4	1.6	加藤清正（虎狩り）	
			2-11	B	27	33	0.4	1.6	不明	
			2-12	B	24	30	0.5	1.7	那須与一か	
			2-13	種玩具	34	11	0.9	6.7	笛	
栗橋宿跡 第8地点	遺構外		2-14	C	27	19	0.7	2.4	三番叟の烏帽子	2
	第407号土壇	3期※	3-15	B	44	33	0.3	5.3	武者（弁慶か）	
			3-16	B	46	37	0.3	9.0	渡辺綱（鬼退治）	
		9期	3-17	B	37	30	0.3	4.2	武者	
			3-18	B	35	31	0.4	3.6	加藤清正（虎狩り）	
			3-19	B	42	32	0.3	6.4	加藤清正（虎狩り）	
栗橋宿跡 第9地点	第485号土壇		3-20	B	44	33	0.5	6.0	加藤清正（虎狩り）	3
	第264号土壇	8期	3-21	B	50	33	1.0	7.0	源（六孫王）経基	
	第238号土壇	9期	3-22	A 1	21	21	1.0	2.6	菊水文か	
栗橋宿跡 第6地点	遺構外		3-23	A 1	23	23	1.0	2.6	紋（竜胆）	4
	第6号埋設桶	9期	3-24	C	19	19	1.7	3.2	三つ目入道	5
伝世資料			3-25	B	32	20	0.4	1.7	源頼光（酒吞童子退治）	
			3-26	B	28	20	0.4	1.8	加藤清正（虎狩り）	

※ 19世紀後半の遺物混入

明治42年（1909）生まれて幼少期を渋谷で過ごした小説家、大岡昇平の記憶では、直径3cmのものが1枚2銭、直径1cm半の中型が2枚で1銭、直径1cmの無文のものが1銭で6枚売られていたという（大岡 1975）。実物資料とその大きさの認識は異なるが、鉛面子が大きさを基準に販売されていたことは、この集計結果からも裏付けられる。

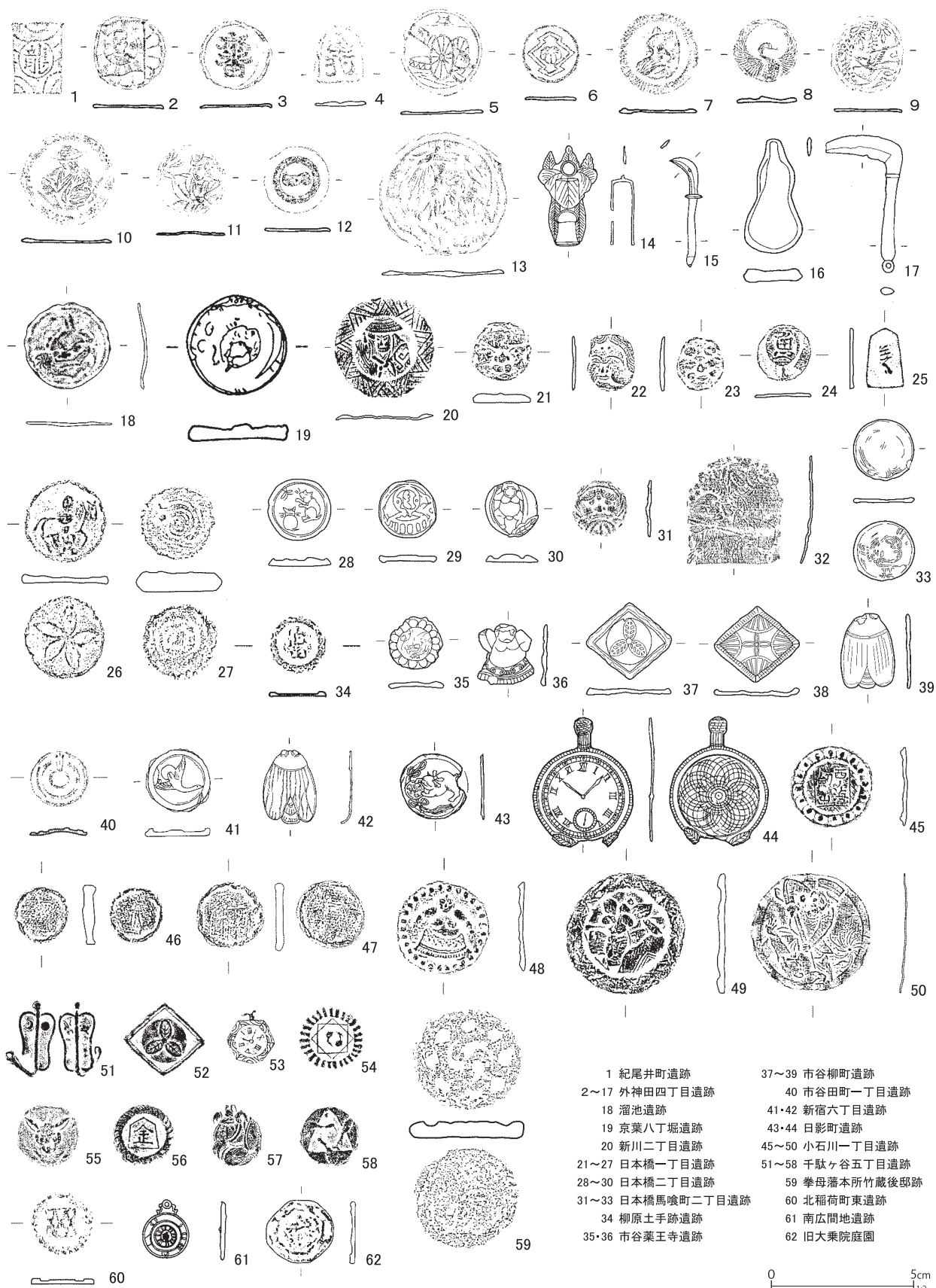
中型とした鉛面子のサイズに幅がある原因としては、出土資料は「新品」ではなく、子供たちに弄ばれた結果、変形（大型化）している可能性が高いことと、販売元（製造元）が一つではないことにあると考えられる。

絵柄の種類は、紋、人面、獣面、人物、動物、

器物、風景など、多種多様である。泥面子の面打とその要素は共通するところが多いが、軍人や力士など、個人を特定できる絵柄が含まれているのは、A類に限らず鉛面子の特徴といえる。また、販売時には赤や青の彩色が施されていたことが記録されている（大岡 1975）。出土資料では、千駄ヶ谷五丁目遺跡出土例などに、彩色の観察できるものが含まれている。

B類

B類は、栗橋宿跡関連遺跡出土の鉛面子としてもっとも数が多く、破片を含めて17点である（第2図3～12、第3図15～21）。栗橋宿跡第8地点第485号土壇や、北2丁目陣屋跡第2号井戸跡のように、複数のB類鉛面子が一つの遺構か



第4図 遺跡出土鉛製玩具類

第2表 遺跡出土鉛面子一覧表（埼玉県を除く）

遺跡名	所在	出土遺構名	遺構種類	遺構の時期	類別	絵柄・文様	縦 (mm)	横 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	挿図 No.	文献 No.
天台寺跡	岩手県二戸市	60-A1			B	赤穂浪士	284	127	06	0.7		6
養種園遺跡	宮城県仙台市若林区	SD402	溝跡		A 1	不明	22	22	3			7
神田猿樂町一丁目遺跡	東京都千代田区	40 号遺構	井戸跡	19 世紀初頭～大正 4 年前後	A 1	歌舞伎役者「ひみき」	23	23	1	3		8
紀尾井町遺跡	東京都千代田区	SR10	土坑	明治 10 年代後半以降	C	鳳（丸に「龍」）	25	17			4-1	9
外神田四丁目遺跡	東京都千代田区	0003	埋桶		A 1	鳳凰（あるいは桐）	22	22	2	3.9		10
		0333	井戸	明治以降	A 1	田植か	20	20	1	1.5		
					A 1	軍人「田原」「西南の役」	25	25	1	3	4-2	
		1013	地下室	明治以降	A 1	一円～二十円金貨の模様	25	25	1	4.1		
		2332	石組溝	明治以降	A 1	蓑	21	21	1	2		
					A 1	丸に「六番」	24	24	1	2.7	4-3	
		3002	U字溝	明治以降	A 1	城と橋	25	25	1	2.6		
					A 1	植物	25	25	1	2.7		
		A 1			鳳凰	27	27	2	5.3			
		A 1			月に兎	29	29	3	9.7			
		3018	南北街路 東側溝	明治以降	A 1	植物に蜂	30	30	2	7.6		
					A 1	不明	22	22	2	4.6		
		3026	明治以降	A 1	大面	20	20	2	2.6			
				C	将棋駒「金将」	21	18	2	3.7	4-4		
		切石基礎	明治時代		A 1	月に兎	29	29	3	9.4		
					A 1	紋（五つ鳥の嘴）	28	28	1	4.9		
					A 1	大砲	30	30	1	4	4-5	
					A 1	月に橋	28	28	2	8.3		
					A 1	紋（右に三つ巴）	31	31	2	12.2		
					A 1	紋（角寄か）	23	23	2	4.8	4-6	
					A 1	力士（梅）	19	19	1	3.4		
					A 1	紋（陰松皮菱）	19	19	1	2.6		
					A 1	景色	24	24	2	3.9		
					A 1	犬面	27	27	2	5.3	4-7	
					A 1	紋（鶴の丸）	21	21	2	4.4	4-8	
					A 1	纏	23	23	1	2		
					A 1	花輪に壱両小判	21	21	2	4.6		
					A 1	紋（結綿）	27	27	3	12.7		
					A 1	不明	24	24	2	4.6		
					A 1	纏	23	23	0.5	2.1		
					A 1	波に飛沫	24	24	1	2.5		
					A 1	藤に燕	26	26	1	3.2	4-9	
					A 1	月に鶴・松	27	27	0.5	2.8		
					A 1	西洋軍人	23	23	2	4.3		
					A 1	武士	31	31	1	5.7	4-10	
					A 1	月に雁・薄「八月」	27	27	1	3.6		
					A 1	紋（海老の丸）	21	21	2	5.9		
					A 1	武士	24	24	1	2.3	4-11	
					A 1	纏に梯子	24	24	1	3.8		
					A 1	丸に「一」	22	22	1	2	4-12	
					A 1	神武天皇と鳥（神武東遷）	42	42	1	11.5	4-13	
					A 1	牡丹花	26	26	2	3.9		
					A 1	月に雁・薄「八月」	27	27	1	4.2		
					A 1	車輪文	26	26	2	6.2		
溜池遺跡	東京都千代田区	①一括			A 1	獅子頭	30	30	1	4	4-18	11
新川二丁目遺跡	東京都中央区	1 区第 2 面遺構外		明治 30 ～ 40 年代頃	A 1	武士	34	34	2	11	4-20	12
		1 区第 3 面遺構外		近代初頭～明治 20 年ころ	A 1	達磨	26	24	1	5		
日本橋一丁目遺跡	東京都中央区	172 号遺構	穴蔵	19 世紀後葉～	A 1	人面	20	20	3	8	4-21	13 14
		470 号遺構	埋樹	19 世紀後葉～	C	お多福面	19	16	1	2.5	4-22	
					C	翁面	19	17	2	3	4-23	
					A 1	桜花	19	19	2	3.8		
					A 1	団扇に「魚」	20	20	1	3.1	4-24	
					A 1	僧兵か	21	21	2	4.6		

遺跡名	所在	出土遺構名	遺構種類	遺構の時期	類別	絵柄・文様	縦 (mm)	横 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	挿図 No.	文献 No.
日本橋一丁目遺跡	東京都中央区	470号遺構	埋枿	19世紀後葉～	C	纏(よ組)	18	18	1	33		13 14
					C	将棋駒「金」	21	14	1	26	425	
					A2	六角形亀甲に菊花	233	208	3	35		
		115号遺構	埋甕	19世紀中葉(幕末)	A1	不明	218	218	08	24		
		263号遺構	穴蔵	19世紀中葉(幕末)	A1	不明(風景か)	26	26	4	145		
		第1面一括		19世紀中葉(幕末)	A1	雷神太鼓		24.1	12	5.6		
		286号遺構	土蔵跡	18世紀末葉～ 19世紀中葉	A1	不明(銭貨か)	25	24	4	138		
		145号遺構	下水溝	18世紀前葉～後葉	C	大黒面	17.5	19.3	1.3	29		
日本橋二丁目遺跡	東京都中央区	159号遺構	穴蔵	18世紀末葉～明治10年頃	A1	猫	22	22	3	6.9	428	15
					A1	纏(二番組も組)	20	20	3	6.1	429	
					C	桃太郎	20	18	3	4.6	430	
日本橋蛸殻町一丁目遺跡	東京都中央区	17号遺構	埋桶	明治20～大正10年代	A1	鼠	22	22	3	7		16
		70号遺構	埋甕	明治20～大正10年代	A1	月に雁・薄「八月」	27	27	1.5	3		
		244号遺構	土坑	18世紀初頭～18世紀中頃	A1	車輪	25.5	25.5	2	6.5		
日本橋馬喰町二丁目遺跡	東京都中央区	第4面48号遺構	土坑	18世紀後葉～19世紀中葉頃	A1	達磨	19.5	20	1	2	431	18
					B	牛若丸と弁慶	37	34	1	6	432	
柳原土手跡遺跡	東京都中央区	8号遺構6層	道路状遺構	19世紀以降	A1	丸に「伯山」	20	20	1.5	3.6	434	19
大和芝村藩織田家屋敷跡遺跡	東京都港区	023号遺構	遺物集中	19世紀前葉～後葉か	C	武者	35	35	1	62		20
市谷薬王寺遺跡	東京都新宿区市	I地区5区一括			A2	花形菊輪に梅花か	18	18	2	2.7	435	21
		210号遺構	土坑	18世紀第4四半期	C	力士	20	22	2	2.6	436	
		475号遺構	土坑	18世紀第4四半期～	C	達磨	23	25	1	2.3		
市谷柳町遺跡	東京都新宿区	132号遺構	土坑	19世紀	C	葛三柏文	22	24	2	3.6		21
		140号遺構	硬化面	19世紀第2～第3四半期	A2	菱形丸に三柏文	26	30	2	4.1	437	
		144号遺構	溝跡	18世紀後葉	A1	不明	22	24	2	4.2		
		401号遺構	土層	19世紀第3四半期	A1	丸に※	16	16	1	1.4		
		420号遺構	土坑	江戸時代	A2	菱形花菱文	26	30	2	2.8	438	
		VIII地区43区一括			C	蟬	25	19	2	4.2	439	
市谷田町一丁目遺跡	東京都新宿区	B-2号遺構	井戸跡	17世紀後半～19世紀	C	一つ目の化物	20	21	3	7.6		22
新宿六丁目遺跡	東京都新宿区	170 17-20	溝跡	19世紀後葉	A1	的に矢	20	20	1.5	4	440	
					A1	月に雁	23	23	3	4	442	23
内藤町遺跡	東京都新宿区	O6			A1	鳳凰	42	42		10.79		24
					A1	鳳凰	42	42		10.7		
					A1	不明	41	41		8		
		G9			A1	般若面	22	22		1.4		
四谷一丁目遺跡	東京都新宿区	塩6①633A遺構	地下室	19世紀第4四半期廃絶	A1	帆船	22.1	21.7	1.7	4.8		25 26
		塩7①521遺構	土坑	18世紀第1四半期廃絶	A1	笹に虎	29.3	27.6	3.4	17.2		
日影町遺跡	東京都文京区	遺構外			A1	不明	21.5	20.3	3.6	12		27
					A1	猫に毬	23	23	0.9		443	
小石川一丁目遺跡	東京都文京区	盛土2層	盛土	19世紀後葉	A1	「西ノ海 劔山」	27.5	27.5	2.5	5.5	445	28
		北②-1区006遺構	池跡	明治期廃絶	A1	相撲力士	31	31	2.5	12.4	448	
					A1	暫(歌舞伎)	42	41.5	3	25.8	449	
		遺構外			A1	軍人(兵士)	41.5	41	2.5	8.9	450	
東京大学本郷構内の遺跡	東京都文京区	1区近代層			C	金太郎面	25	24	1			29
千駄ヶ谷五丁目遺跡	東京都渋谷区	118号遺構	溝跡	明治10年代	A1	宝珠・分銅・七宝	23.7	24.5	0.7			30
		0052遺構	井戸跡	明治20年代か	A1	成敗図	38.7	37.4	0.9			
					A1	龍	41.1	40	1.1			
					A1	人物	23.8	22.9	2			
		0097遺構	井戸跡		A1	おかめ・般若・天狗	40	40	1			
		0283遺構	井戸跡	1830～40年代	A1	軍人	31.9	32	0.5			
		0336遺構	土坑	明治30年代か	A1	神仏	37.8	39.9	0.7			
		0509遺構	施設付土坑(杭)	明治末大正か	A1	龍	40.1	41.9	1.1			
					A1	菊花	36.4	35.6	0.9			

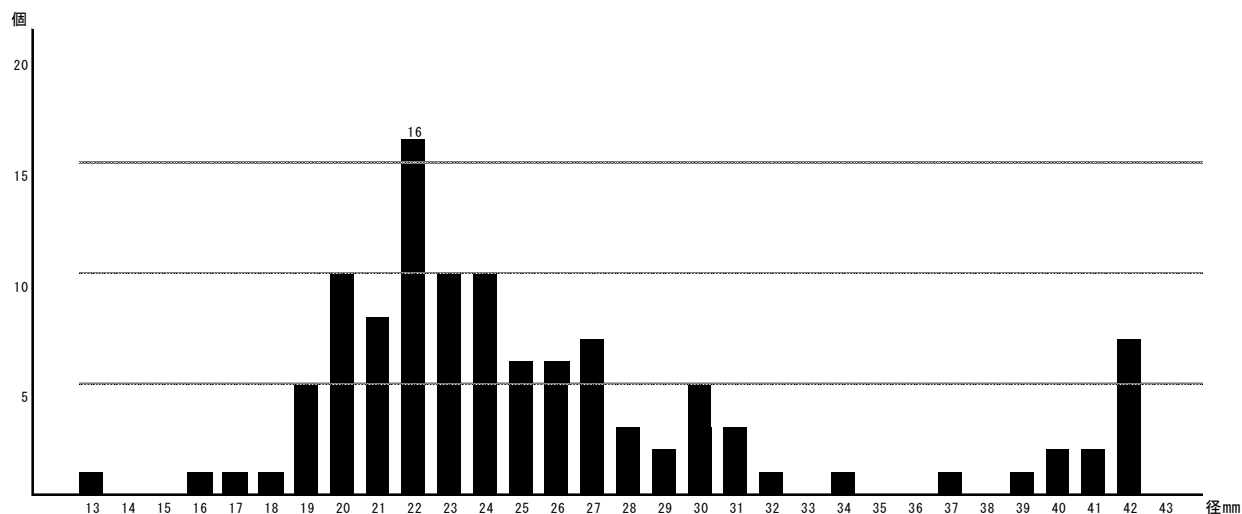
遺跡名	所在	出土遺構名	遺構種類	遺構の時期	類別	絵柄・文様	縦 (mm)	横 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	挿図 No.	文献 No.
千駄ヶ谷五丁目遺跡	東京都渋谷区	1138 遺構	土坑	1750～1840 年代	A 1	不明	21.3	21.3	0.9			30
		遺構No.5 区	遺物集中	1770～1802 年代	A 1	東郷平八郎	29.3	27.5	1.3			
					A 1	東郷平八郎	42.1	41.5	1.5			
千駄ヶ谷五丁目遺跡 (3 次調査)	東京都渋谷区	70 号遺構	井戸跡		A 2	菱形 三つ柏文	29	26	1	3.9	4-52	31
		140 号遺構	土坑	下限は 1880 年代	A 1	傘	17	16	0.5	1.1		
					A 1	相撲力士	18	17	2	2.9		
					A 1	桃の実	18	19	1	2.8		
					C	酒樽「東京一」	18	16	3	4.4		
					A 1	「朝日」	19	20	1	2.8		
					A 1	「朝日」	20	20	1	2.7		
					C	懐中時計	19	17	0.5	1.2	4-53	
					A 1	打ち出の小槌	19	19	2	3.4		
					A 1	竹と梅	22	20	2	6.1		
					A 1	二重の扇	22	22	1	3.2		
					A 1	正方形重ねに巴	22	22	2	5.4	4-54	
					A 1	兎面	22	23	2	6.6	4-55	
					A 1	不明	22	22	2	5.5		
		142 号遺構	土坑	1870 年代	A 1	将棋駒 (金)	21	21	1	2.9	4-56	
					C	着衣の狐	22	17	0.5	1.9	4-57	
					A 1	三つ鶴	22	20	1	3.3	4-58	
雑司が谷遺跡	東京都豊島区	7 区 1b 号遺構	土坑	明治末頃廃絶	A 2	小判形 人物 (兵士) か	27	21	1.2			32
染井遺跡	東京都豊島区	西区Ⅱ-1 層			A 1	閉扇三つ重ねか	24	24	1	4		33
霊山寺遺跡	東京都墨田区	43 号墓	墓 (木棺)	19 世紀後葉～20 世紀初頭	C	達磨・絵馬・扉ほか						34
北稲荷町東遺跡	東京都台東区	14a 号遺構	溝跡	19 世紀中葉以降に廃絶	A 1	三つ杵	22	21.5	2	5	4-60	35
南広間地遺跡	東京都日野市	SX58N	土坑	近現代	C	懐中時計	20	16	2		4-61	36
旧大乗院庭園	奈良県奈良市	水槽 SX8838	水槽	明治 16～32 年	A 2	八角形 不明	22	23	2		4-62	37

第 3 表 遺跡出土鉛製玩具一覧表 (埼玉県を除く)

遺跡名	所在	出土遺構名	遺構種類	遺構の時期	種類	形状・絵柄・文様	縦 (mm)	横 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	挿図 No.	文献 No.
外神田四丁目遺跡	東京都千代田区	0155	埋桶	明治以降	種玩具	笛	35	21	0.8	4.8	4-14	10
		0423	ゴミ穴	大正	種玩具	サーベル (柄のみ)	28	20	2	1.8		
		1319			種玩具	薙刀	38	12	1	1	4-15	
		1423	溝跡		再生品	瓢箪形	40	20	5	18.2	4-16	
		13^15FF 2 面			種玩具	鎌 (紐通し孔あり)	47	27	2.5	4	4-17	
京葉線八丁堀遺跡	東京都中央区	第 1 区遺構外 F-8			再生品	不明 (文鎖か)	35	35	5.5	50	4-19	38
日本橋一丁目遺跡	東京都中央区	115 号遺構	埋甕	19 世紀中葉 (幕末)	種玩具	大黒	118	9.7	6.5	3.9		13 14
		258・324 号遺構	芥溜・土蔵跡	18 世紀後葉頃	両面①	表: 騎馬武者 裏: 桜花	30	30	3	14.1	4-26	
		367 号遺構	建物跡	18 世紀前葉～中葉	両面②	枝状線刻 (両面)	34.2	35.4	8.6	75.2		
		460 号遺構	下水木樋	17 世紀前葉～中葉	両面②	渦巻 (両面)	30	30	7	48.4	4-27	
日本橋馬喰町二丁目遺跡	東京都中央区	2 区攪乱			両面①	不明 (両面)	21	21	2	4	4-33	15
日影町遺跡	東京都文京区	遺構外			種玩具	時計	45.5	35	1.2		4-44	27
小石川一丁目遺跡	東京都文京区	南②・2 区 114 号遺構	整地跡	17 世紀末～18 世紀初頭	おはじ形	不明 (両面)	20.5	19.5	4.3	12.1	4-46	28
					不明 (両面)	不明 (両面)	23.5	24	3	12	4-47	
千駄ヶ谷五丁目遺跡	東京都渋谷区	0052 遺構	井戸跡	明治 20 年代	種玩具	兵士	17.9	7	2.2			30
千駄ヶ谷五丁目遺跡 (3 次調査)		0283 遺構	井戸跡	1830～40 年代	種玩具	笛	39.4	14.8	12.3			
		0509 遺構	施設付土坑 (杭)	明治末大正か	種玩具	笛	58.9	14.5	14.3			
		70 号遺構	井戸跡		種玩具	軍配	36	13	0.5	1.7		
霊山寺遺跡	東京都墨田区	43 号墓	墓 (木棺)	19 世紀後葉～20 世紀初頭	種玩具	冑・薙刀・鉄・鎌・鍬ほか						34
挙母藩本所竹蔵後邸跡	東京都墨田区	5 号遺構	下水溝	19 世紀第 4 四半期	再生品	連珠三叉文	38	40	6	4.2	4-59	39

※脱稿後に東京都新宿区南元町所在の正見寺跡 124 号墓から、鉛面子 17 点が出土していることを知った。内訳は、A 1 類 1 点、A 2 類 3 点、C 類 13 点である。A 1 類の絵柄は蓑、A 2 類は菱形 (2) と六角形 (1) がある。C 類には烏帽子 (4)、独楽 (2)、おかめ (2)、蟬 (4)、カバン (1) があり、烏帽子は北 2 丁目陣屋跡出土例 (第 2 図 14) と同巧品である。被葬者は 6 才程度の小児、時期は 19 世紀中葉～後葉とされる。

文献: 大成エンジニアリング株式会社 2005 『崇源寺・正見寺跡』 宗教法人明治神宮



第5図 A1類鉛面子直径別グラフ

ら出土するのは特異例といえる。既報告では稀少例で、二戸市天台寺跡、中央区日本橋馬喰町二丁目遺跡（第4図32）の2遺跡から1点ずつ出土している（註1）。

出土資料の大きさは、長さ34mm以上に限られている。もっとも大型の資料は、北2丁目陣屋跡から出土した鉛面子のうちの1点で、長さ56mm、幅50mmである（第2図3）。現存する鉛面子B類では、現在、国立民族学博物館が所蔵している多田敏捷コレクションの、「5.5×7.2cm」と記されたものが最大級であろう（多田編1992）。筆者の手元にある伝世資料は、長さ32mm（第3図25）と28mm（同図26）で、出土資料と比べてややサイズが小さい。また、鈴木常雄が『鉛面子図譜』（鈴木常雄1941）に掲載している鉛面子では、B類は長さ23mm～46mmと幅があるが、31～33mmのことが多い。

文献には、鉛面子（B類）の大きさについて、「二寸四方位（形状大小種々なれども概して云う）」（太田編1901・駿河 静城生報告）、「普通は小形にして一寸四方位の大きさなる。十枚一銭。中形五厘より七八厘。大形一銭より二銭に至る。三寸大なるも少なからず。」（若尾1919）と記されている。A1類と同様に、大きさによる基準を設ける

ことはできそうであるが、対象の絶対数が少ないため、ここではその可能性を示すにとどめておく。出土資料の厚さは1mm以下で、その多くは1mmに満たない。

絵柄は、横綱の土俵入りや、武者絵・歌舞伎などを題材とした場面や仕草を細かな線描で表現している。外形はおおむね方形を基準とし、下辺は直線的であるが、周囲を絵柄に合わせて切り抜いているのが特徴である。また、遺存状態の良好な伝世資料では、その絵柄に制約されずに、赤や青、紫などの彩色を局所的に施しているが、出土資料ではその大半が失われている。伝世資料の第3図26で観察できる彩色の範囲を示しておく。

C類

栗橋宿跡関連遺跡では、北2丁目陣屋跡出土の第2図14と栗橋宿跡第6地点出土の第3図24が該当する。都内の遺跡では、面、相撲力士、妖怪、達磨、蟬、将棋駒、酒樽、時計などを模った鉛面子が出土している（第4図1・4・22・23・25・30・36・39・42・53・57・61）。管見では23点の出土例を確認することができた。大きさは17～35mmと模るものによって幅が大きい。このC類は泥面子では芥子面に相当し、出土資料の多くはA類と同様にその絵柄に共通点が認められる。

D類

先に引用した大岡の回想にある、両面ともに絵柄のない無文の鉛面子をD類と規定する。その特徴を大岡は「これは直径一センチぐらいの鉛の円い断片とでもいうべきもので、模様がなく、従って裏表の区別はほとんどない。」と述べている(大岡 1975)。また、『小川町の歴史』(民俗編)には「今の一〇円玉よりやや小さめの金属片を、一銭で一〇枚売っていた。これをナマリと呼んでいた。」(小川町 2001)とあるが、この鉛面子もおそらくD類にあたると考えられる。現在のところ、出土資料や伝世資料には見当たらない。

(3) 産地

鉛面子は、東京、大阪、京都に産地(製造元)があるとされ、それぞれの特徴については次のようにまとめられる(鈴木常雄 1941・中田 1970・鷹家 1991)。

東京産：丸型やそれに近い一定の型の中に童話の主人公、武者絵、鬼の面など種々の図柄を盛り込む。

大阪産：七福神や相撲、武者絵など絵柄の型をそのままに打ち抜いた形をしている。

京都産：東京・大阪産のものに比べると小型で、絵柄も飛行機や汽車、自動車など文明開化を象徴したものが多く。

ただし、産地を同定した具体的な根拠に関しては明示されていない。おそらく、コレクションの入手先によって判断したものと想像される。鈴木常雄は、「今戸あたりの職人がよく石の上に型を置いて作ったものだ。」(鈴木 1937)と述べているが、形状に関しては言及していない。

今回の分類に当てはめると、東京産はA類、大阪産はB類に相当する。京都産はC類に相当するが、鷹家や多田のコレクションの写真をみると、A類に属する鉛面子も含まれている(鷹家 1991、多田編 1992)。現在の考古学的知見や文献調査から、産地について検証してみたい。

東京で幼少期から小学生を過ごした著名人の回想録には、A1類の鉛面子が登場する。先にあげた大岡のほかに、明治28年(1895)横浜市に生まれ、青山で育った版画家の川上澄夫は「鉛めんこは鉛の圓形の薄き板に、武者繪など薄肉彫りの如く現はれ、赤緑紫などの染料に彩られ、經一寸位のものを中心に大小ありしなり」と回想している(川上 1944)。

鉛面子を含む小物玩具は、駄菓子屋や縁日の出店などで販売されていた(伊藤 1932・鈴木忠五 1978など)。明治期の東京における駄菓子は、初期には零細な菓子製造屋が直接販売するか、挽売と呼ばれる業者が菓子を少しずつ購入し、抽斗のついた箱を乗せた車で小売りの店を回ることによって流通した。こうした挽売を介した流通経路は、後年関東一円に販路を広げ、基本的には昭和10年代まで続いたという(松平 2001)。小物玩具も駄菓子と同様に、製造元→挽売→小売(駄菓子屋)という流通経路をたどって販売されたと仮定すると、東京都区内の遺跡から多く出土するA1類は東京産と推測される。また、鈴木常雄の指摘するように、泥面子の製作地であった今戸の職人が、鉛面子の製作も担うようになったのであれば、両者の絵柄の共通性も理解できる。

鉛面子A2類で、京都産とされるものの形状は小判形や多角形、雫形やハート形など、バラエティーに富む。絵柄も自動車や飛行機などの乗物や、マンドリンなどの楽器があり(多田編 1992)、西洋風である。出土資料では、関西圏唯一の出土例である、奈良市旧大乘院庭園出土の八角形のA2類鉛面子(第4図62)が、絵柄は不明なものの京都産である可能性が高い。

鉛面子B類に関しては甲府と駿河における使用例(若尾 1919・太田編 1901・駿河 静城生報告)の他には、回想録等に記載がなく、関西圏の遺跡における遺物としての報告例も見当たらない。現状では、その産地を大阪産とするのは、先学を信

じる以外にないが、大阪は鉛製も含めた「めんこ」の一大製作地として、他を圧倒していたとされている（武井 1934）。

風俗画家の伊藤晴雨（明治 15 年（1882）浅草生まれ）が描いた「子ども玩具の図」（伊藤 1932）には、A 1 類と B 類の鉛面子がみられるので、東京の駄菓子屋の店頭には鉛面子 B 類が A 1 類とともに置かれていたことは確かであろう。出土例や文献から、鉛面子 B 類は都内ばかりではなく、近郊の埼玉県、山梨県、静岡県（駿河）、さらに遠隔地である岩手県まで流通していた形跡があることから、A 1 類とは異なり、広範囲な販売ルートが存在していた可能性を示唆している。

大岡の回想には、鉛面子 A 1 類以外にも「蝶やトンボや蜂の翅をたたんだ形」「背景の花の形を輪郭とした手の込んだ製品」「奴唄」の形のもの」があり（大岡 1975）、これらは C 類に属する鉛面子と思われる。鉛面子 C 類の出土例のうち、泥面子の芥子面との共通性を有する面や蟬などを模ったものは、東京産と推測される。A 1 類と同様の流通経路で販売されたものであろう。

一方、明治 41 年（1908）生まれで、京都市育ちの松田道雄（医師・評論家）は、「カネメンは直径が一センチより少し大きい鉛の薄片で、カブラ、ラッパ、えび、きつねの面、機関車などの形に打ちぬいてある。」と回想している（松田 1975）。同じく京都市で育った明治 40 年（1907）生まれの湯川秀樹（物理学者）の回想録には、「「カナメン」というのもあった。小さな鉛の薄板である。飛行機や、飛行船などの形をしていた。」という記載がある（湯川 1960）。機関車や飛行機、飛行船を模った意匠は、鷹家のいう京都産とされる鉛面子の特徴を備えており、京都産の鉛面子が存在した蓋然性は高いと考えられる。出土資料では、千駄ヶ谷五丁目遺跡や日野市南広間地遺跡出土の時計を模した鉛面子 C 類（第 4 図 53・61）は、京都産と断定はできないかもしれないが、少な

くともその影響を受けて製作された可能性がある（註 2）。

以上、鉛面子の類型と産地との関係をまとめると、A 類は東京産が主流であるが、京都産のものも含まれ、形状や絵柄によって区別することができる。B 類は大阪産の可能性が高い。C 類には東京産と京都産とがあり、A 類と同様に絵柄によって分けることが可能である。

（4）遊戯方法

鉛面子の遊び方は、様々な文献に詳細が述べられているので、ここでは簡単な紹介にとどめておく。「めんこ」は 2 人以上で遊ぶ賭け事遊びで、勝負に勝った者が、負けた者の「めんこ」を自分のものにできるのが原則（その権利を放棄する場合もある）である。実際に見たり、遊んだりした人々が記した鉛面子の遊び方を以下に記す。

①「起こし」

相手の鉛面子に自分の鉛面子を打ち当てて、裏返しにした者が勝ち。（太田編 1901・若尾 1919・有馬 1953・大岡 1975・川上 1944・竹内 1987・松田 1975）

②「つつけん」

相手の鉛面子に自分の鉛面子をぶつけて、圏外から出したものが勝ち。（太田編 1901・石井 1934）

③「さば」「トーケン」

複数枚の鉛面子をまとめて撒き、いくつかに分かれた塊のうえに、自分の鉛面子を投げて乗せれば、その塊の鉛面子を自分のものにできる。（大岡 1975・川上 1944・渋沢 1980・竹内 1987）

④「カッパ」

三つの升目のうち二か所に、親以外の子が任意の枚数の鉛面子を張る。親が自分の持つ鉛面子を 3 枚ずつ升目に置き、端数の数が一か二か三かによって、張っている場所の鉛面子に対してその数だけ相手に払い、あとは自分のものになる。だれも張らなかった場所になったときは、その場の全

部を取りあげることができる。(渋沢 1980)

①の「起こし」にはA類やB類の鉛面子が使われ(太田編 1901・若尾 1919)、③の「さば」では、地面に撒くものをD類(「平のナマリメン」)、投げて乗せる方にC類(「蝶やトンボや蜂」)を用いていた(大岡 1975)。

多くの人が記憶している①「起こし」がもっともポピュラーな遊び方であったと思われる。①では、裏返ったかどうか勝負のカギになるため、その区別がつきやすいように、裏が無文であることがポイントとなる。このことは、鉛面子の重要な条件といえよう。

(5) 製造方法

鉛面子の製造には次の2つの方法が想定されている。一つは、鉄製の型の上に鉛をのせ、金槌で打ち出して作る方法(酒井 1998)で、もう一つは、石に彫刻した型に、溶かした鉛を流しこんで作る方法(深谷編 1960)である。

鉛面子B類の伝世資料(第3図26)には、周囲の一部に鉛湯がはみ出した「バリ」が認められる。掲載されている鉛面子の画像(多田編 1992の京都産鉛面子)にも「バリ」が顕著なものがみられる。この「バリ」は、その鉛面子が流し込み方式で製作されたことを示す明白な根拠となりうる。また、報告書作成作業に伴って実施した北2丁目陣屋跡出土例のX線透過調査では、内部に小さな粒上の空隙が観察できるものがあり、これも流し込みの際に生じた痕跡と推定される。

以上の数少ない知見によって、すべての鉛面子が流し込み方式で製作されたと判断するのは早計である。今後、出土資料の分析例が増加することに期待したい。

(6) 年代観

栗橋宿跡関連遺跡では、鉛面子を出土した遺構の年代は、栗橋9期(19世紀中葉～後葉)に属するものが多い。この傾向は江戸遺跡においても同様で、鉛面子を出土した遺構の年代は、19世

紀後半代に属するものが多くを占めている。この考古学的事実は、鉛面子が流行し始めた年代を、明治12・3(1879・80)年頃(深谷編 1960・中田 1970)、あるいは明治10年代(加藤 1996)とする先学の見解と符合する。

しかし、鉛面子は、仲光が指摘した中央区日本橋二丁目遺跡の159号遺構のように、年代が19世紀中葉まで遡る可能性のある遺構からも出土している(第4図28～30)。日本橋一丁目遺跡では、第1面(19世紀中葉)の115号遺構・263号遺構や、第2面(18世紀末葉～19世紀中葉)の286号遺構から鉛面子が出土している。この他にも、中央区日本橋馬喰町二丁目遺跡の第4面48号遺構(第4図31・32)は18世紀後葉～19世紀中葉、新宿区市谷柳町遺跡の401号遺構(第4図38)は19世紀第3四半期の年代観が与えられている。

栗橋宿跡関連遺跡においても、栗橋宿跡第9地点の第264号土壌出土鉛面子(第3図20)と共伴する陶磁器の全体的な様相は、栗橋8期(19世紀第3四半期)と比定されている。地域を離れたこれらの考古学的事実は、仲光の指摘のように、鉛面子の出現が幕末まで遡る可能性が高いことを示している。

また、中央区柳原土手跡遺跡8号遺構(道路状遺構)出土のA1類鉛面子(第4図34)には丸に「伯山」の文字がある。これは講談師の神田伯山と解釈される。神田伯山の初代は江戸時代後期から明治初頭の人で、名人と謳われ、事実上の神田派の祖とされる。二代目の神田伯山は明治3年(1870)に襲名し、当代の三名人と称された(佐野 1943)。8号遺構の年代は18世紀中葉から近代初頭頃とされるため(仲光 2013)、この鉛面子が初代の伯山に該当すると仮定すると、鉛面子の初現が幕末にまで遡るという仮説を補強するものになり得る。

鉛面子自体が年代の基準資料になる場合もあ

る。鉛面子B類の北2丁目陣屋跡出土例(第2図3)に描かれている土俵入りをする相撲力士は、化粧まわしに「小錦」とあることから、第17代目横綱の小錦八十吉であることが分かる。小錦の横綱の在位は明治29年(1896)5月から明治34年(1901)年1月であり(『日本相撲協会公式サイト』)、この鉛面子はその在位中に製造されたと考えるのが自然である。出土遺構(第2号井戸跡)の廃絶年代や、共伴遺物の年代の目安を示す遺物として重要な意味を持つ。

鉛面子の消滅時期については、出土資料では把握することはできなかった。明治40～43年(1907～1909)生まれの人の子どもの頃の記憶に、鉛面子が登場していること(前出)、大正8年(1919)に若尾がすでに、過去の遊びとして鉛面子を紹介していることから、大正時代の前半には廃れていたと推定される。

鉛面子を型式学的に分析し、編年することは、出土遺物の詳細な観察を経ていない現状では時期尚早であるが、絵柄とそれを型に彫り刻む技術の巧拙がその基準になるかもしれない。栗橋宿跡関連遺跡の出土資料の第2図5や第3図21などは、彫りが半立体的で緻密であり、構図も巧みであるが、伝世資料の第3図26は平面的な線刻で表現も拙い。若尾は、鉛面子(B類)は明治25年頃から品質が劣って絵柄も稚拙になり、日清戦争の戦争画を題したものに至っては、最も甚だしいと指摘している(若尾1919)。

このほかに、「バリ」の処理の有無や、文字の正確さ(第2図4は型に「徳川」と刻んだため、仕上がりは鏡文字になっている)もポイントとなろう。さらに、鉛の成分分析や、科学的手法で製造方法の違いが明らかにできれば、編年の大きな基準になり得よう。

(7) 消滅の原因

鉛面子の消滅した具体的な理由について、中田幸平(中田1970)や加藤理(加藤1996)は独

自の説を展開している。

中田は、鉛面子の流行が下火となった直接的な原因として、明治33年(1900)に大阪で起きた鉛毒事件で鉛面子や鉛製玩具が製造禁止となったと主張した。この事件を契機に、鉛面子は次第に遊ばれなくなり、一部ではひそかに作られ販売されていたものの、明治40年(1907)頃に消滅したと述べている。この説を「鉛毒事件説」とする。

これに対し、加藤は、中田の提唱した説は、明治40年代に幼少期を過ごした人々の回想に鉛面子がしばしば登場することから不正確であるとした。そのうえで、明治20年代に「めんこ」の主流が鉛面子から紙面子へと移行していった理由には、鉛毒事件の影響以外に、日清戦争のため原料である鉛が高騰したことが影響を与えたと指摘した。その後、鉛面子は軍事物資として国に供出されて、昭和の初めに終焉を迎えたとしている。この説を「鉛高騰・供出説」とする。

中田の鉛毒事件説は『日本金属玩具史』(深谷編1960)に依拠するところが大きい。「大阪の鉛毒事件」について、同書には有毒塗料事件として記録されている。

明治33年(1900)、大阪府で一人の子どもの病気の原因が玩具の塗料と診断された。連絡を受けた警察が玩具を押収して検査した結果、塗料に鉛が含まれているため有害であると断定した。そのうえで警察は有害と判断した玩具を没収して、問屋や製造工場の目の前で焼却した。業界側も急遽組合をつくって解決策を上申したが、聞き入れられず、明治33年6月30日付で、大阪府令第41号「有害性着色料取締規則施行細則」が発令された。この事件は東京にも波及して、警視庁の検閲が厳しさを増し、業界は金属玩具の製造を中止しなければならないところまで追い込まれた。そこで、製造業者と問屋は合議の上で陳情書を作成し、監督官庁の内務省に嘆願し、塗料業者とも

連携して、無害塗料の使用許可を申請するなど、問題の解決に尽力した。その結果、内務省は数十種類の塗料の使用を許可し、官報に発表して、この問題は解決を見た。大阪の業界はこれを契機に、玩具の塗料を、手塗りからブリキ印刷に移行した。

以上は、同書による事件の顛末を要約したものである。引用されている大阪府令第41号の基となったのは、明治33年（1900）4月17日に発令された内務省令第17号「有害性著色料取締規則」（「著」が正しい表記）である（『官報』明治33年第5034号）。この省令は、有害性の着色料を飲食物、化粧品、歯磨き、玩具、衣服に使用することを禁じたものである。第一条で有害な着色料を二種に分け、そのうち第一種の含有物に砒素をはじめとして、銅や水銀、錫や鉛などが指定されている（註3）。

中田の言うように、この大阪で起こった鉛害事件によって、鉛面子や鉛製玩具が製造禁止の処分を受けたとは、『日本金属文化史』には一言も書かれていない。あえてそれらしい文言を探すなら、『日本金属文化史』の別項に、この事件の影響で、大阪では鉛製の金属玩具からアンチモニー製の玩具の製造が盛んになったという記載が見られる程度である。

中田や、そのもととなった『日本金属文化史』の文脈では、大阪の鉛害事件を契機に「有害性著色料取締規則」が制定されたように読みとれるが、はたしてそうであろうか。発令に先立つ明治11年（1878）には、有害着色料に関する「取締方」が各府県に通達されていた。だが、この通達には、有害着色料を使用した食品の販売禁止や、着色料の使用禁止を製造業者に強制する罰則規定がなかったため、取締りは行われていたものの、実効力はあまりなかったようである。そのため、しばしば有毒着色料によって人体に被害が及ぶ事件が起こり、社会問題となっていた（光武1985）。有名なのは、明治20年（1887）歌舞伎の女形

の人気役者が舞台上で倒れ、白粉に含まれていた鉛が原因の慢性鉛中毒と診断された事件である（国立国会図書館2021）。規則発令の直前、明治33年（1900）3月には東京下谷の警視庁管内で、玩具の「首振虎」に有害塗料を使用したことが検査で判明したため、管内の玩具問屋や小売店に調査が入り、該当品に対し「相当處置」をしていたことが、『警察要務目録』（警視庁1900）にみられ、「有害着色の玩具」との見出しで3月4日付けの朝日新聞でも報道された。このような事件が頻発し、取締り法規制定の機運が高まった結果、漸く罰則（二十五圓以下ノ罰金ニ處ス）を伴った「有害性著色料取締規則」が発令されたと推測される。

取締規則の施行後、警視庁管内では取締りが強化されたとみえ、明治34年（1901）3月と4月に、立て続けて有害色素を使用していた玩具が処分されたという記事がみえる（3月27日付朝日新聞「有害色素含有の玩具」・4月2日付朝日新聞「販売禁止の玩具」）。処分された玩具は、「笛付招猫」「土製鳩笛」「紐付毬」「紙製鈴売人形」「紙製にてニスを塗りたる太鼓、寶袋及び鯛の豆太鼓」などである。その6年後の明治40年（1907）にも、「土製金魚」と「護謨製舌出人形」に有害着色料の使用が認められたため、製造人の判明を待ってただちに告発するという記事が『風俗画報』に掲載されている（第366号「有害着色玩具の取締」）。

鉛面子にも着色塗料が使用されていたので、製造に影響が全くなかったとは断言できないが、鉛面子を製造禁止に処したという裏付けを、当時の報道記事や文献から確認することはできなかった。

以上のように、「鉛メンコその他の鉛玩具製品は、四月一七日（註4）をもって製造禁止となった。」と中田が主張する「鉛害事件説」は、根拠に乏しく、事実誤認や誇張が多く含まれていると考えざるを得ない。

次に、加藤の主張した「鉛高騰・供出説」を検

証してみる。加藤は、原料の鉛が日清戦争の影響で高騰したことを、明治27年（1894）8月25日付の「鉛暴騰」という時事新報の記事を引用して裏付けをとっている。日清戦争後の明治33年（1900）6月20日付の朝日新聞にも「清國事件と鉛相場」という見出しで、豪州物と米国物の鉛相場が騰貴したとの記事がみえる。しかし、日清戦争によって鉛の価格が上がったことが、鉛面子の製造にすぐに影響を及ぼしたかどうかは不透明である。鉛はリサイクルが容易であるため、子どもが勝負に勝って貯めた鉛面子を、駄菓子屋や玩具屋が換金していたとの記述もある（小宮編1955）。

加藤は、軍事物資として供出されたことを証明する資料は提示していない。『日本金属文化史』は、太平洋戦争下において、金属製玩具が輸出用を除いて製造禁止になったことを記載している。もし、日清・日露両戦争の際に、子どもの玩具である鉛面子の軍事物資としての供出が、製造業者や国民に対して布告されたとすれば、金属製玩具の製造にも大きな影響があったことは当然であり、そのことにまったく触れていないのは不自然である。

悉皆調査を経たわけではないので、断言はできないが、報道記事や回顧録などの文献に、そのような記載や記述をみつけることはできなかった。

加藤は、「めんこ」遊びという児童文化の歴史を編むにあたって、子どもの能動性を重視した。例えば、「紙めんこ」の発祥は子どもが厚紙を四角く切って「起こし」で遊んでいたのをみた大人が商品化したものと主張している。それにもかかわらず、鉛面子の廃絶に関しては、その要因を「大人の都合」に求め、子どもの視点を軽視している。鉛面子が衰退していったのは、流行遅れとして子どもの嗜好が離れたことが最も大きな要因なのではないだろうか。

「但し明治二十五年頃より以後は品質大に俗悪に流れ絵も拙く、日清戦争によりて起りたる戦争

画を題としたるものに至りては、最も甚だし斯くを次第に人の嗜好を離れ同時に他方絵鉛（筆者注「紙めんこ」のこと）の生ずるあり。其安価にして破損する少き。遂に其位置を代うるに至れり。」（若尾1919）

先にも紹介したが、この若尾の見解は、この問題の最も的確な回答であるように筆者には思われる。

以上、長々と述べてきたが、鉛面子の終焉に関する両者の説は、ともに根拠を証明できていない仮説であることが明らかとなった。しかしながら、中田の鉛害事件説は、そのストーリー性の受け入れやすさのせいか、その後の研究書や一般書には、あたかも事実のように紹介されてきた（菅原ほか1976・酒井1980・鷹家1991など）。近年（2019年）にも、国立民族学博物館で開催された『子ども／おもちゃの博覧会』の展示図録において、鉛面子のキャプションにこの説が採用されている。一般向けの展示図録であってはなおさら、定説とされている見解といえども、それを引用する際には、原典に当たるなど、十分な検討を重ねる必要がある。

3 鉛製種玩具

種玩具とは、「ガラガラ煎餅」の中に入れた玩具のことである。ガラガラ煎餅とは、瓦煎餅などで作った包みの中に玩具を入れた駄菓子で、振るとガラガラと音がしたためこの名がついた（齋藤1968）。地域によっては「からから煎餅」（仙台・石橋1961）「運徳煎餅」（山形・河名1905）「包み煎餅」（岡山・料治1963）などと呼ばれていた。食品玩具のはしりであり、現在も山形県鶴岡市で「からからせんべい」として販売されている。

そのルーツは、江戸時代後期の「大黒煎餅」まで遡る。『嬉遊笑覧』（喜多村1830）によると、初めは木の大黒を包んだ一つの煎餅を当たりとして多売するというものであったが、のちにはさまざまなものを入れて売るようになり、子どもがこ

れを好んだという。明治時代には一個五厘から一錢くらいで販売され（齋藤 1968）、風刺画にも登場するほどポピュラーな駄菓子であった（註 5）。

種玩具には、江戸時代末期には泥面子や土人形などが含まれていた。郷土玩具研究家の有坂與太郎の『おもちゃ葉奈志』には、今戸産の「がらがら種」の写真が掲載されている（有坂 1930）。有坂は、「「がらがら」は内部の品を想像して、割るといふだけの瞬間的興味に外ならねど、内部より出づる小人形の奇功さは、寧ろ他の土偶のいづれをも凌駕する構圖を存せり飽迄も至純なるがよし。」と評価している（註 6）。そこには、大黒や布袋などの七福神や、天神、達磨などがみられる。背面の写真がないので、泥面子の芥子面か、土人形かは判断できない。余談になるが、江戸遺跡から出土する泥面子や土人形の流通に、ガラガラ煎餅が果たした役割を考慮に入れるべきであろう。

明治 27 年（1894）札幌市生まれの作家、森田たまは随筆『竹』に、ガラガラ煎餅の記憶を次のように書き留めている。「—子供の時分、ガラガラせんべいといふものがあつた。奈良で鹿にやるやうな粗末なおせんべいが、三角形の袋になつてゐて、振るとカラカラと中で何か音がする。それをパンと両手にはさんでわると、中から鉛の笛だの泥の人形だの、いろいろ變つたおもちゃが出てくるのである。」（森田 1939）。

明治 32 年（1899）岡山県生まれの古美術研究家、料治熊太は、「村に一軒ある雑貨屋に、包み煎餅というのを売っていた。その煎餅は、一つ一錢で、振ればことごと音かしていた。何が出るかわからない。中をあけると、鉛でできたラッパや勲章などが出た。煎餅は、あまりうまくはなかったが、何かいいものが出るかもしれないという期待で人気があった。鉛の鉛筆けずりでも出ると大当たりであった。」と回顧している（料治 1963）。

これらの記載から、遅くとも明治 30 年代には、種玩具に鉛製のものがあつたことを確認できる。鉛製の種玩具には、鍋・釜・庖丁・小舟・魚・笛・天神・鼓などがあり（深谷編 1960・齋藤編 1968）、山形の「運徳煎餅」の鉛製種玩具には、甲冑・大刀・薙刀・槍・差股などの武具や、鍋・釜・碗・手桶・竈などの台所道具があげられている（河名 1905）。

鈴木常雄の残したスケッチ（鈴木常雄 1940）では、独楽や宝船、自動車、電車、軍艦、ピストル、手鏡などがあり、大きなものになると 5 cm を超えるものもみられる。伊藤によれば、ガラガラ煎餅は「昔は直径一尺以上もある大きさのもの」があり、類似品として最中の皮でできた「蛤のガラガラ」を紹介している。価格は「当時一個十錢、十五錢」で、通常のもの 10 倍もした（伊藤晴雨 1932）。明治 20 年（1887）日本橋生まれの俳人、長谷川かな女の「駄菓子」というエッセイ（長谷川 1954）にある「松月堂の蛤形のがらがら」はそれに該当するのであろう。大きなサイズの鉛製玩具は、このような高価なガラガラ煎餅の種玩具なのかもしれない。

種玩具に該当する鉛製品の出土例は、鉛面子に比べて少ない。栗橋宿跡関連遺跡では、北 2 丁目陣屋跡の第 2 号井戸跡から鉛面子 12 枚と共に出土した鉛製の笛（第 2 図 13）がそれにあたる。前出した森田の回想にも「鉛の笛」とあるため、種玩具と考えて間違いないであろう。

都内で鉛製種玩具が出土した遺跡は、現段階で筆者の知り得たのは、千代田区外神田四丁目遺跡、中央区日本橋一丁目遺跡、渋谷区千駄ヶ谷五丁目遺跡、渋谷区日影町遺跡、墨田区靈山寺遺跡の 5 遺跡である。

外神田四丁目遺跡では、井戸跡などから鉛笛（第 4 図 14）や、鉛製のサーベル、薙刀（第 4 図 15）、鎌（第 4 図 17）が出土している。鎌には柄の先端に紐通しの孔が設けられる。これは、鈴

木常雄が紹介した「腰下げの部」の種玩具と同等品と考えられる。「腰下げの部」に残されたスケッチには、鉞やシャベルなどの器物や、鶏や犬といった動物がみられる（鈴木常雄 1940）。

日本橋一丁目遺跡の 115 号遺構（埋嚢）からは、鉛製の大黒が出土している。115 号遺構は便槽で、遺構の廃絶年代は 19 世紀中葉（幕末）である。報告書には掲載されていないが、中央区立郷土資料館所蔵品アーカイブスおよび中央区立郷土天文館で令和 3 年に開催された企画展「江戸のカナモノ」から情報を得た。展示では信仰の対象とみなされていたが、高さ約 1.2cm と小粒であることから、ガラガラ煎餅の鉛玩具である可能性は高い。種玩具は「大黒種」とも称される（斎藤編 1968）ように、材質に関わらず大黒が一般的であったことは、『嬉遊笑覧』の記載でも容易に想像される（註 5 も参照されたい）。玩具であるがゆえに、子どもが誤飲してしまったとすれば、便槽からの出土にも説明はつく。

千駄ヶ谷五丁目遺跡では、北 2 丁目遺跡出土例と同様の鉛笛が、0283 号遺構（井戸跡）と 0509 号遺構（施設付土坑）から出土している。また、0052 号遺構（井戸跡）からは、鉛製の兵士の人形が、70 号遺構（井戸跡）からは表裏に文様を配した軍配（第 4 図 51）が出土している。これらはいずれも鉛面子と相伴している。

日影町遺跡では遺構外出土遺物ではあるが、懐中時計を模した鉛製品が出土している（第 4 図 44）。縦 45.5mm と一般的な鉛面子 C 類と比較するとサイズは大きめである。

霊山寺遺跡の 43 号墓では、木棺から性別不明の幼児と老年女性の骨とともに、多量の鉛製玩具が副葬されていた。達磨や絵馬、凧などの鉛面子の他に、冑や薙刀、鉞や鎌など種玩具と推測されるものが含まれている。この遺構の時期は 19 世紀後葉から 20 世紀初頭に比定されている。

中田は、鉛製玩具の製造方法が、打ち出し

から流し込みへ改善されて、量産が可能になったときに、鉛面子が生まれたと解説しており（中田 1970）、そのニュアンスは、鉛製種玩具を初めて量産化された金属製玩具と位置づけた『日本金属玩具史』の見解とは若干異なる。加藤は、もともとガラガラ煎餅の種玩具であった土製の芥子面の代わりに鉛製の種玩具が入れられるようになり、それを手にした当時の子どもが「起こし」という新しい遊び方を生み出したと述べている（加藤 1996）。いずれの見解も、種玩具が鉛製になったことが、鉛面子の誕生に大きく影響したことを示唆している。中田の説では、鉛製玩具が鉛面子に先行し、加藤の説であれば、鉛面子 C 類が他の鉛面子より先行することになるが、それらを証明するような考古学的事実は、現在のところ確認されていない。

4 その他の鉛製玩具

（1）鑄造遊び

文献には、鉛面子を溶かして型に入れるという、泥面子の面模と同じような遊び方をしていた記録がみられる。

1889 年（明治 22）浅草生まれの児童文学作家、渋沢青花は、「紙メンコは絵を見て楽しんだが、鉛メンコは、鍋のなかにたくさん入れて火で溶かし土焼きの鑄型でエビとかタコとか梅の花がたとか、いろいろの形のケサン（文鎮）を造ったりした。」と回想している（渋沢 1980）。

若尾もまた、使われなくなった鉛面子は、釣りの錘などにされたり、溶かして型に詰めて文鎮や、無患子（ムクロジ）に詰めて鉛玉にしたりするなどして、廃棄されることはないと述べている（若尾 1919）。

近世以降の遺跡から、文様の施されない鉛の製品が出土することがある。そのなかには、上記のような遊びに関わる再生品も、おそらく含まれていると推定されるが、その判断は難しい。ここで

は、その可能性がある鉛製品をあけておく。

まず、千代田区外神田四丁目遺跡の1423（溝跡）から出土している、瓢箪形の鉛製品（第4図16）がそれに該当するものと思われる。無文で、文様のない粗製品である（註7）。

中央区京葉線八丁堀遺跡や、墨田区拳母藩本所竹蔵後邸跡からは、裏は平滑であるが、5mm以上の厚さがある円板状の鉛製品が出土している。

京葉線八丁堀遺跡例（第4図19）は、表面に絵柄はなく、つまみ状の突起をもつ。遺構外の出土で時期は不明である。拳母藩本所竹蔵後邸跡例（第4図59）は、5号遺構（下水溝）から出土したもので、表面に連珠三巴文が陰刻されている。遺構の時期は19世紀第4四半期に属する。

これらの鉛製品は厚さ以外に鉛面子A1類と区別する要素はなく、鉛面子の可能性も捨てきれない。しかし、京葉線八丁堀遺跡例は50g、拳母藩本所竹蔵後邸跡例は42gと、文鎮とするには心許ないものの、鉛面子A1類（平均5.39g）とは異なる重量感や、表面の造形の簡易さから、鉛を溶かして作った再生品の可能性を否定することはできないと考える。

（2）「おはじき」形鉛製品

文京区小石川一丁目遺跡の114号遺構からは、鉛面子A1類よりも厚みのある円盤状の鉛製品2点が出土している（第4図46・47）。両例とも無文の縁が帯状に巡り、内区はやや薄くなる。その両面に絵柄が施されているようだが、意匠はよくわからない。形状的には「おはじき」に近い。

出土した114号遺構は、17世紀末～18世紀初頭に構築されたと推定されるが、重複する19世紀前葉頃の遺構由来の遺物が混入している。この鉛製品がどちらに帰属するかは不明であるが、鉛製玩具としての「おはじき」の存在を想定しておきたい。

石川県加賀地方で流行していた「福德はじき」（芥子面に相当する）の記述の中に、「その後鉛製の

の福德出でけるが、これは重くして弾くに不便なれば、あまり流行らず。」（太田編1901 髑髏居子報告）とある。この鉛製の「おはじき」がどのような形状であったのかは定かではないが、「弾く」ためには、ある程度の厚みが必要であろうから、鉛面子よりも厚い製品であったことが想像される。

（3）両面施文の円盤状鉛製品

出土資料には円形で両面に文様や絵柄の施された鉛製品が存在する。両面に文様や絵柄をつけるためには、鉛面子の製作とは異なる製造過程が想定されるため、鉛製玩具でも鉛面子とは別の範疇に入るものと考えたい。このうち、厚さが鉛面子と同等のものを①、厚さが7mm以上のものを②としておく。

①は、中央区日本橋一丁目遺跡で1点、中央区日本橋馬喰町二丁目遺跡で1点出土している。日本橋一丁目遺跡例（第4図26）は、258・324号遺構（芥溜・土蔵跡）から出土したもので、片面に騎馬武者、反対面に桜花の絵柄が施されている。

日本橋馬喰町二丁目遺跡例（第4図33）は、2区攪乱から出土した。両面の文様の意匠は不明である。

②は日本橋一丁目遺跡で2点の出土をみる。367号遺構（建物跡）出土例は、両面に枝状の線刻文が施される（報告書非掲載品・中央区立郷土資料館の所蔵品アーカイブスより）。460号遺構（下水木樋）出土例（第4図27）は、両面に異なる渦巻文が施される。両例とも周縁が丸みを帯びる形状に共通性があり、同じ性格の遺物とみてよいであろう。

これらの遺物を出土した日本橋一丁目遺跡の遺構の時期は、①の258・324号遺構は第8面（18世紀中葉～後葉頃）、②の367号遺構は第7面（18世紀前葉～中葉）、460号遺構は第13面（17世紀前葉～中葉）に帰属している。いずれも、今回

対象とした鉛製玩具の流行時期とは乖離がある。
①の大きさは鉛面子 A 1 類と同等であり、絵柄も比較的明瞭であるため、鉛面子に先行する玩具の可能性もある。②の形状は「おはじき」に類似するが、重量があるため、「おはじき遊び」には不適と考えられる。文様は簡素で稚拙なため、弾丸（鉛玉）などの鉛製品の再利用品とも考えられるが、判断するには根拠が乏しい。

おわりに

この小文は、出土した鉛製玩具を整理することを通して、考古学の対象として俎上に乗せること

を目的としたものである。その目的を果たしたかどうかは、いささか心許ないが、近世～近代の遺跡調査において、鉛製の玩具が出土した際には、参考としていただければ幸甚である。今回の見解を補強、あるいは反駁するような類例の増加を期待したい。また、一覧表から遺漏している出土例もまだ多く存在すると思われる。ご教示いただければ幸いである。

栗橋宿跡関連遺跡では、商標のある金属製品や特許製品も出土している。近代における産業史を解明するうえで貴重な資料になり得る可能性もある。今後、機会があれば紹介していきたい。

註

- 1 日本橋馬喰町二丁目遺跡例（第 4 - 32 図 2）は報告書では銅製品となっている。
- 2 鈴木常雄によると、京都在住であった玩具蒐集家の拙健之助が、京都産の鉛面子を報告しているという（鈴木常雄 1941）が、該当する文献を探し当てることはできなかった。今後の継続課題としたい。
- 3 玩具に関しての規定があるのは第 4 条である。
第四條 第一條第一種ノ著色料ハ販賣ノ用ニ供スル化粧品、齒磨、小兒玩弄品（繪雙紙、錦繪、色紙ヲ含ム）ノ製造又ハ著色ニ使用スルコトヲ得ス但シ左ニ掲クルモノハ此ノ限ニ在ラス
一 漆、硝子、釉藥又ハ珐瑯質ニ有害性著色料ヲ融和シタルモノ
二 護謄質ニ融和シタル金硫黄
その後の陳情の結果、数十種類の塗料の使用許可が発表された官報とは、『官報』明治 42 年（1909）第 7665 号（1 月 16 日発令）のことと思われる。内務省令第 1 号に、有害性著色料取締規則の第 4 条が下記のように改正されている。
第四條中第二號ノ次ニ左ノ二號を加ヘ第二項ヲ追加ス
三 乾燥油又ハ「ワニス」ニ融和シ若ハ「ワニス」ヲ塗布シタル酸化鉛（鉛丹ヲ含ム）又ハ格羅謨

酸鉛（硫酸鉛ト併用セルモノヲ含ム）但シ剥離シ易キモノハ此ノ限ニ在ラス

- 四 水ニ不溶性ノ亞鉛化合物ニシテ護謄質又ハ「ワニス」ニ融和シ若ハ「ワニス」ヲ塗布シタルモノ

酸化亞鉛又ハ硫化亞鉛ハ護謄質又ハ「ワニス」ニ融和シ若ハ「ワニス」ヲ塗布スル場合ノ外販賣ノ用ニ供スル護謄製玩弄品ノ製造又ハ著色ニ使用スルコトヲ得ス

- 4 4 月 17 日は「有害性著色料取締規則」の発令日であって、施行日は同年 7 月 1 日である。
- 5 新形ガラガラ煎餅 ◎何が出る 「施政方針」と封のされたガラガラ煎餅を持った野党党首の会話「何が出るか早く開けて見たい」「出た処が土の大黒だろう」（『團圓珍聞』1081 号明治 29（1896）年）
- 6 昭和に入り、玩具蒐集家がこの種玩具を珍重するようになったため、「五つ一円」という高値がつき、ある道具屋が、本所・深川の道路工事などで掘り出された種玩具をただ同然で買い取り、蒐集家に売りつけたという逸話が伝えられている（読売新聞社便利部編 1936）。
- 7 外神田四丁目遺跡ではこのほかにも円板状で無文の鉛製品が数点出土している。これらも鑄造遊びに伴う再生品に該当するのかもしれない。

文献一覧（第1・2表文献No）

- 1 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2024a『北2丁目陣屋跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第480集
- 2 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2022a『栗橋宿跡Ⅵ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第473集
- 3 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2022b『栗橋宿跡Ⅶ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第474集
- 4 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2024b『栗橋宿跡Ⅷ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第482集
- 5 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2019『栗橋宿跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第456集
- 6 浄法寺町教育委員会 1986『天台寺跡—昭和60年度発掘調査概報—』
- 7 仙台市教育委員会 2009『養種園遺跡第2次・保春院前遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第344集
- 8 千代田区・加藤建設株式会社 2022『神田猿樂町一丁目遺跡』
- 9 千代田区紀尾井町遺跡調査会 1988『紀尾井町遺跡調査報告書』
- 10 財団法人東京都生涯学習文化財団東京都埋蔵文化財センター 2004『外神田四丁目遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第147集
- 11 財団法人東京都スポーツ文化事業団東京都埋蔵文化財センター 2011『溜池遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第258集
- 12 中央区教育委員会 2017『新川二丁目遺跡Ⅱ』
- 13 日本橋一丁目遺跡調査会 2003『日本橋一丁目遺跡』
- 14 中央区立郷土資料館収蔵品アーカイブス
- 15 日本橋二丁目遺跡調査会 2001『日本橋二丁目遺跡』
- 16 中央区教育委員会 2005『日本橋蛸殻町一丁目遺跡』三井不動産株式会社
- 17 中央区教育委員会 2004『日本橋蛸殻町一丁目遺跡Ⅱ』株式会社エルカクエイ
- 18 中央区教育委員会 2021『日本橋馬喰町二丁目遺跡』株式会社ホテル高輪・中央区教育委員会
- 19 中央区教育委員会 2013『柳原土手跡遺跡』学校法人日本橋女学館・中央区教育委員会
- 20 公益財団法人東京都スポーツ文化事業団東京都埋蔵文化財センター 2020『四谷一丁目遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第350集
- 21 財団法人東京都スポーツ文化事業団東京都埋蔵文化財センター 2014『市谷薬王寺遺跡Ⅴ 市谷柳町遺跡Ⅱ』東京都埋蔵文化財センター調査報告第292集
- 22 財団法人新宿区生涯学習財団 2001『市谷田町一丁目遺跡』
- 23 財団法人東京都生涯学習文化財団東京都埋蔵文化財センター 2005『新宿六丁目遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第163集
- 24 財団法人東京都生涯学習文化財団東京都埋蔵文化財センター 2002『内藤町遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第118集
- 25 公益財団法人東京都スポーツ文化事業団東京都埋蔵文化財センター 2020『大和芝村藩織田家屋敷跡遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第354集
- 26 大八木謙司 2021「新宿区四谷一丁目遺跡6次調査出土の金属製品について」『研究論集』XXXV 公益財団法人東京都スポーツ文化事業団東京都埋蔵文化財センター pp.63-98
- 27 都立学会 2000『日影町Ⅲ』
- 28 春日・後樂園駅前地区市街地再開発組合 2022『小石川一丁目遺跡』
- 29 東京大学埋蔵文化財調査室 2016『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院入院棟A地点』東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書13
- 30 千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会 1997『千駄ヶ谷五丁目遺跡』
- 31 株式会社四門 2013『千駄ヶ谷五丁目遺跡3次調査』

- 32 都道整備事業関連豊島区遺跡調査団 2010『雑司が谷Ⅴ』豊島区遺跡調査会調査報告 24 豊島区遺跡調査会
- 33 特定非営利活動法人としま遺跡調査会 2009『染井ⅩⅣ』としま遺跡調査会調査報告 1
- 34 墨田区教育委員会 2022『霊山寺遺跡（墨田区№ 66 遺跡）』
- 35 台東区教育委員会 2020『北稲荷町東遺跡』台東区埋蔵文化財発掘調査報告書 86 東京建物株式会社・台東区教育委員会
- 36 日野市遺跡調査会 2003『南広間地遺跡』国土交通省関東地方整備局相武国道工事事務所
- 37 独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 2018『名勝旧大乘院庭園発掘調査報告』奈良文化財研究所学報第 97 冊
- 38 京葉線八丁堀遺跡調査会 1990『京葉線八丁堀遺跡』
- 39 株式会社イビソク 2020『拳母藩本所竹蔵後邸跡（墨田区№ 61 遺跡）』サムティ株式会社

引用・参考文献（表文献以外）

- 有坂與太郎 1930『おもちゃ葉杂志』（その一）今戸人形 郷土玩具普及會
- 有馬頼寧 1953『七十年の回想』創元社
- 石井柏亭 1934『明暗 石井柏亭自伝』第三書院
- 石橋幸作 1961『駄菓子ふるさと』未來社
- 伊藤晴雨 1932『いろは引江戸と東京風俗野史』第 6 巻 城北書院（2001 年国書刊行会より宮尾與男編注『江戸と東京 風俗野史』として復刻 pp.285-337）
- 茨城民俗学会 1970『子どもの歳時と遊び』第一法規出版株式会社
- 大岡昇平 1975『少年—ある自伝の試み』筑摩書房
- 太田才次郎編 1901『日本全国児童遊戯法』博文館（1968 年平凡社より瀬田貞二解説『日本児童遊戯集』東洋文庫 122 として復刻）
- 小川町 2001『小川町の歴史』別編 民俗編
- 加藤理 1996『くめんこ』の文化史』日本児童文化史叢書 11 久山社
- 画報生 1907「有害着色玩具の取締」『風俗画報』第 366 号 東陽堂 pp.32-33
- 川上澄夫 1944『明治少年懷古』明治美術研究所（1975 年冬至書房再刊）
- 河名雅齋 1905「運徳煎餅」（付 編者云）『風俗画報』第 307 号 東陽堂 p.26
- 喜多川守貞（1837 起稿）『守貞謄稿』第二十五編「遊戯」（翻刻 朝倉治彦・柏川修一編 1992『守貞謄稿』第 4 巻 東京堂出版）
- 喜多村信節 1830『嬉遊笑覧』卷之六下兒戲 卷之九飲食（『日本隨筆大成』第 2 期別巻下 日本隨筆大成刊行会 1929 所載）
- 桑原健次郎編 1975『沼田の民俗と伝承』沼田市教育委員会
- 群馬県教育委員会 1968a『北橘村の民俗』群馬県民俗調査報告書第 10 集
- 群馬県教育委員会 1968b『白沢村の民俗』群馬県民俗調査報告書第 11 集
- 警視庁 1900「第三部通牒 首振虎（玩具）取締ノ件」『警察要務目録』明治三十三年三月（上巻） p.16
- 国立民族学博物館 2019『特別展 子ども／おもちゃの博覧会』
- 小宮豊隆編 1955『明治文化史』第 10 巻趣味・娯楽編 洋々社
- 斎藤良輔編 1968『日本人形玩具辞典』東京堂出版
- 酒井浩 1998「教育博物館資料紹介 (85) 面子」『全人教育』第 72 巻第 3 号№ 597（1998 年 3 月号）玉川大学通信教育部 pp.44-45
- 佐野孝 1943『講談五百年』鶴書房
- 渋谷青花 1980『浅草っ子』増補改訂版 造形社
- 菅原道彦ほか 1976『ふるさとあそびの事典』東陽出版

- 鈴木常雄 1937 『鯛提灯 第一輯 鉛面子図絵』(村田書店 1980『郷土玩具図説』第1巻所載 pp.141-156)
- 鈴木常雄 1940 『繪屏風 第参号』(村田書店 1981『郷土玩具図説』第2巻所載 pp.39-49)
- 鈴木常雄 1941 『鉛面子図譜』(村田書店 1981『郷土玩具図説』第2巻所載 pp.291-304)
- 鈴木常雄 1957 『めんこ変遷小史』(村田書店 1983『郷土玩具図説』第3巻所載 pp.313-333)
- 鈴木忠五 1978 『幼児追憶記』 谷沢書房
- 鷹家春文 1991 『めんこグラフィティ～甦る時代のヒーローたち～』 光琳社出版
- 武井武雄 1934 『日本郷土玩具 東の部・西の部』 金星堂
- 竹内重雄 1987 『大正風俗スケッチ 東京あれこれ』 国書刊行会
- 田代亀雄 1943 『小田原歳時記』 小田原国民文学研究会
- 多田敏捷編 1992 『めんこ・ビー玉』おもちゃ博物館④ 京都書院
- 田原町教育委員会 1971 『田原町史』上巻
- 塚本伴治 1967 『竹馬 明治の子どもの遊び』 福祉新聞社
- 中田幸平 1970 『日本の児童遊戯』 社会思想社
- 仲光克顕 2001 「陶磁器類にみる各生活面の年代観」『日本橋二丁目遺跡』 日本橋二丁目遺跡調査会 pp.357-363
- 仲光克顕 2013 「調査成果からみた柳原土手跡遺跡」『柳原土手跡遺跡』 学校法人日本橋女学館・中央区教育委員会 pp.161-165
- 長谷川かな女 1954 「駄菓子」『あまカラ』No.34 甘辛社 pp.11-12
- 半澤敏郎 1980 『童遊文化史一考現に基づく考証的研究一』 東京書籍
- 深谷庄一編 1960 『日本金属玩具史』 日本金属玩具史編纂委員会
- 藤本浩之輔 1986 『聞き書き 明治の子どもと暮らし』 本邦書籍
- 松田道雄 1975 『花洛一京都追憶一』 岩波新書 945 岩波書店
- 松平誠 2001 「幕末から大正中期中における東京駄菓子の展開一川越菓子屋横丁と比較して一」『生活学論叢』Vol. 6 日本生活学会 pp.55-65
- 團團社 1896 『團團珍聞』第1081号
- 光武幸 1985 「我国における着色料取締りの歴史一歴史的経緯からみた着色料の存在意義一」『北海道大学大学院環境科学研究科邦文紀要』No.1 pp.1-23
- 森田たま 1939 『随筆 竹』 中央公論社
- 湯川秀樹 1960 『旅人一ある物理学者の回想一』 角川文庫 1883 角川書店
- 吉川英治 1961 『忘れ残りの記』 雪華社
- 読売新聞社便利部編 1936 『こんな物が金になる』 八重洲書房
- 料治熊太 1963 『明治もの蒐集』 徳間書店
- 若尾謹之助 1919 『おもちゃ籠』 合名会社浅川商店印刷部
- 和辻哲郎 1961 『自叙傳の試み』 中央公論社
- 『官報』第5034号 1900
- 『官報』第7665号 1909
- (ウェブサイト)
- 国立国会図書館 Website2021年公開 ミニ電子展示「本の万華鏡 第29回めーきゅぷ今昔一江戸から昭和の化粧文化一」
- 日本相撲協会『日本相撲協会公式サイト』

図版出典

第2図1～14、第2図22～26:筆者実測 他は第1表文献より転載 第4図:第2・3表文献より転載(一部改変)